

書評

伊原千晶 編著

岩下雅充・禹 鍾泰・川本哲郎・佐別当義博・出口治男・村本詔司 執筆

「心理臨床の法と倫理」京都学園大学総合研究所叢書 14

京都文教大学 臨床心理学部 教授 柴田 長生

臨床倫理への気づきと出会い

読者は、どのような動機や問題意識や具体的な経験などによって、本書を手にとられるのだろうか。このような問いをまず発するのは、筆者の偏見なのかもしれないが、ある専門領域の「倫理」に関する専門書は、それをひもときたいと思う何らかの先行動機がなければ、なかなか手にされることは少ないと思ったからである。「先行動機」という言葉は、「人権感覚」という言葉に置き換えることもできるだろう。心理臨床に携わり、あるいは心理臨床領域を研究する者は、このような先行動機を常に持ち続けながら、日頃の業務や研究を行うことが大切である。彼らは、何らかの経過によって、何らかの立場を有しながら、何らかの形で、他者のこと（他者の人格）に触れることになるのであるから、本書で述べられている「法と倫理」に関することについては避けて通ることができない。

「はしがき」にこもる編者の思い

本書の「はしがき」には、「なぜ今、心理臨床における法と倫理のことを著すのか」という編者の所感が多義的に述べられていて興味深い。まず、「はしがき」の論旨を少したどってみよう。

*

ある緩和ケアの研究会で取り上げられたケースは、長い闘病を経て末期を迎えられた

方であったが、これまでのご本人の自らへの態度は、病気から来る不安や葛藤を切り捨てて仕事に没入し、がむしゃらな日々を送られてきた。しかし、傍目からは、そのような生活から生じる疲労がストレスとなり、状況を悪化させ、寿命を縮めることは明らかであった。面接室で関わった臨床心理士も、ご本人が不安や葛藤を「切り捨てること」を止め、自らに向きあうことを促すことはできていなかった。緩和ケアにおける心理的援助の目的は何なのであろうか。

死期が近い方が、現状に対して様々な防衛機制を用いることは否定されることではないが、この期に及んでも無理な仕事をして、寿命を縮めることは是なのか。そのような生活態度を、周囲から「自殺行為」だと評価されても、「自己決定」だといえるのか。

一般的に「自殺企図」の場合は、本人の意に反してでも阻止せよという倫理規定がある。しかし、先に述べた末期の方が、現実から目を背けたり、自殺方向への「禁断の扉」を開くことを止めさせることが、倫理的に正しいのだろうか。もしこのご本人が若ければ、止めるべきなのか…。心理臨床の現場では、「善悪の彼岸」だと言いたくなるような事象が山積している。

アメリカでは、「事実告知義務違反により、妊婦の出産判断の機会が奪われ、あるいは出産判断が侵害されたため、告知されておれば産まなかったであろう障害ある子を出産した

場合、その結果親が負うことになった損害について義務違反者に賠償を求める訴訟」を起こす事例があり、損害賠償が認められる場合が多い。この訴訟を「Wrongful Birth」と呼ぶのだが、この判断は法的には正しいにせよ、倫理的にはどうなのだろう。障害を持つ子の養育は「損害」なのか。障害を有する可能性の高い子を中絶することが「正しい」ことなのか。そもそも出生が「Wrongful」だとはどういうことなのか。そして、もしこのような相談を心理臨床家が受けたなら、自らの価値観をどのように整理し、相談者を援助していけばよいのだろうか。

心理臨床の実践においては、このような「人間存在の深淵」というべき事態に遭遇することが間々あるにもかかわらず、それらを根本的に考える機会を持ってないことが多い。心理臨床の現場は、「人権問題」に抵触するような事態や、クライアントやその家族の「権利」を侵害してしまうかもしれないような行為と隣り合わせであるので、法的な問題に発展する可能性も秘めているのだが、そういった実情に対しても、十分な理解があるとはいえない。

本書執筆の動機は、このような現状に対して、心理臨床家が自らの自覚を高め、真にクライアントやその家族を援助することが可能になるためのきっかけを提供することであった。

*

いささか論旨紹介が長くなってしまったが、本書の存在意義が、このはしがきの中に凝縮されているように思われた。我々が属する心理臨床の業界において、はしがきで書かれたような問いかけが、心理臨床に携わる方々の中で、本当にリアリティーを伴って意識されているだろうか。危うさと隣り合わせ

なところで参与しなければならない宿命を持つのが心理臨床であるのなら、彼らは、今思い起こしても身震いするような「危うい実体験」や、今でもずっと心の中に残り続けるような臨床体験などをどの程度お持ちであろうか。筆者は、上に述べたような臨床家の中に残り続ける「意識」や「実体験」などが、臨床倫理におけるそれぞれの臨床家の「イニシャル体験」と考えている。臨床家にとって、これらの「イニシャル体験」は決して忘れてはならないものであるが、その内容は、恐らくは何らかの方向に単一に収斂されて定義づけられるようなものではなく、極端な場合には正反対の性格のものが同居するような「多義的」なものではないかと想像する。

だから、ある価値観を伴う倫理事項が、ある場合には正しくても、別の場合では必ずしも正しいとは言えないような性質を持つのであろう。そして、そのような臨床実践の世界に位置する臨床家が、「倫理的な自覚」を高め、臨床家としての「原理原則」を持ちうるためには、いったいどうすればいいのだろうか。

真正面から取り組んだ労作

本書はそのための「きっかけ提供」をめざしている。心理臨床における倫理問題を述べた著作はこれまでいくつか見られたが、臨床場面における「Q&A」を扱ったものや、心理臨床教育に資する著作が主であった。特に静岡大学の研究グループは、この課題に継続的に取り組んでおられ、その成果が「心理臨床の倫理と法」という著作に集約されている。この成果は、我が国のひとつの到達点だと見ることができよう。

しかし、心理臨床倫理における価値観や基本的な視点の形成に対して、原理原則を踏まえながら真正面から取り組んだ著作はこれま

で見られなかった。本書は、臨床倫理に見識をお持ちの哲学・法学・司法・臨床心理領域のエキスパートが編著者であり、それぞれの立場から承知しておかなければならない基本的な視点（価値観）を簡潔に述べた「入門編」と、現段階での各著者の問題意識を単発の論文のような形で列記した「展開編」から構成されている。真正面から倫理価値を提供し、また検討を加えている点で、本書は労作である。また、実務家である弁護士の立場から、出口治男氏を著者に迎えていることで、リアリティーを増しているように思われた。

本書はこのような性格を持つので、決して読みやすい本ではない。また、各著者の論点の基礎がそれぞれ自由であるので、読者はバラバラな印象を持たれるかもしれない。しかし、本書は臨床倫理を「教条的」に押しつけるような本では決してなく、臨床が持つ様々な切り口を、それこそ多義的に提供してくれる。心に響いてくる様々な切り口を、読者が本書の中から抜き書きしてみるだけでも、心理臨床家としての自覚を高めるきっかけになるのではないだろうか。本書は「基本的なコンテンツ」が豊かなのである。

「入門編」を読む

筆者は、本書を直接編者から購入した。たまたま筆者が所属する機関の大学院生が、心理臨床の法と倫理に関する自主研究会を開きたいと筆者に相談してきたことと、本書の出版を知ったのがほぼ同じ時期であったので、知人である編者を訪ねて研究会の実施方法などについて相談してみようと思い立ったのが、本書と出会うきっかけであった。研究会について相談する中で、編者の伊原氏は、「まず本書の入門編を輪読してみてはどうか」とアドバイスしてくれた。このことを院生に勧め

めたが、結論としては本書の内容がなかなか難しかったようで、院生からは却下された。ベースとなる臨床実感が、院生達にはまだ形成されていないから難しいのかなと思った。しかし筆者にとっては、臨床倫理に関する枠組みが、いろんな観点から整理されていくようで、「入門編」を読み進めることはとても興味深かった。本書は、心理臨床の実務家がまず読んでみるような内容であるのかもしれない。筆者にとって印象深かった記述を、入門編の中から抜き出してみよう。

第1章では、まず「『倫』の構成員の『非対等性』」という記述について。これは「パターンニズム」ということとも関連する。臨床行為を行う者は、「臨床関係の中には常に『非対等性』が存在し、それは不可避である」ことをいつも意識することが重要で、非常に基本的な事柄であるのにとすれば忘れがちになりやすいことだと思われた。我々は「今行っている臨床行為（臨床関係）は、いったい誰のものなのか、誰のためのものなのか…」というところに、いつも回帰しなければならない。このことは、「倫理の相対性」というあたりとも関連するだろう。

「共同体主義倫理」という言葉も興味深かった。共同体という枠組みの中には、「相互関係性の側面」と、「没個人的な力の原理」という二つの側面が存在し、それらが混りあって「社会」という枠組みが構成される。そして、「倫理」や「人権」に関する臨床行為への指摘は、上記の二つの側面によって構成されるであろう社会の様々な領域から、同じような波長で発信されてくる。臨床家は、引き受けている臨床関係を通して、社会から発信されてくる様々な倫理的な指摘や批判などを、相対的かつ敏感に受け止め、識別していかなければ

ればならない。法による規定も、この枠組みの中で受け止めていかなければならないのかもしれない。

第2章では、「個人倫理、職業倫理、組織倫理」という3つの相対的枠組みの提示が印象に残った。臨床家は、この3つの枠組みの狭間で現実的に悩む。「専門職・専門性とは何なのか」について、筆者は長年勤めた児童相談所の同僚たちともよく議論した。

「原則倫理と文脈倫理の対立」ということも印象に残った。そしてこの章で著者が述べておられるような事例だけでなく、心理臨床の世界の中で蓄積され、個々の臨床家が用い続けている、「臨床理論」「臨床技法」「臨床行為」そのものに関する倫理的自省を、この「原則倫理と文脈倫理の対立」という観点から、日々相対的に行われ続けなければならぬだろう。確立された（と見なされている）専門性が、どの局面でもいつも正しいわけではない。心理臨床の側の枠組みを、心理臨床の側で受けとめ返す「倫理的感性」はとても重要であり、時にはそれが「危うさと背中合わせ」であることもあるということがもっと強調されてもよいのではなかろうか。「日本臨床心理士会」や「日本心理臨床学会」の倫理基準は、遵守すべき重要事項が列挙されているが、上に述べた「心理臨床の側の枠組みそのものに対する内省的態度」に関する規範がないことに、個人的には気になっている。

第3章では、法律が有する体系・枠組みが、簡潔にまとめられている。心理臨床家は、法的な枠組みの理解にうといかもしれない。本章の内容は、心理臨床家が基本的に理解しておくべき内容である。

第4章では、心理臨床における様々な事柄が、法に照らせばどのような位置づけになるのかについて、弁護士の観点から具体的に書

かれている。本章の記述は、いちばんイメージしやすいかもしれない。

本章で書かれていることは、これだけでこと足りるわけではない。「情報公開条例」や「個人情報保護条例」が制定され、「子どもの権利条約」が批准された時期に、筆者が勤務していた児童相談所では、処遇困難事例やデリケートな事例に関して、定期的に嘱託弁護士を囲んで勉強会のような形での「事例検討」を開始した。「法律相談」と名付けられたこの会では、弁護士から各事例に関する法律的な解釈やハウツーなども伺うのであるが、それだけでなく福祉専門機関としてふまえておかなければならない基本的な視点を共同で勉強する意味合いが大きかった。そして、この「法律相談」の結果はレジュメ化され、次第に職場の共有財産となっていく。現場実践と並行してこのような取り組みを行い続けることで、現場における「倫理観」が担保され、ケースだけでなく日々現場で対応する職員もまた守られるのだという実感があった。このような内部努力が、心理臨床の各パートにおいて、何らかの形で継続されることが大切であろう。

第5章では、心理臨床の立場から、「倫理に関する検討はなぜ必要か」が論ぜられる。本章では先行論文がよく引用されているが、「『臨床問題に悩む姿勢』そのものが心理臨床の実践に通じる」（松田、2009）という言葉が心にとまった。「心理臨床行為の質の向上のためには、倫理についての感受性を磨く必要がある」という筆者の指摘は、臨床家の基礎的態度としてまことに当を得た指摘である。

「本来的に援助関係の持つプラスの要因そのものが変質して問題をひきおこすことがある」（鑑、2004）という言葉も心に響く。「援

助者が援助的であると同時に破壊的、侵襲的、支配的になることが、対人援助職の特殊な要因である」という筆者の指摘は、深く肝に銘ずるべきである。援助者の中で意識されないままにこのような結果になってしまうことは恐ろしいことであるが、臨床行為は本来的にそのような側面をも内包しているということこそを、まずは謙虚に思い知るべきであろう。

「実際に日本の心理学分野において、自分たちの臨床実践と基本的人権の関連性について正面から論じられたことはない」という指摘は気がかりである。後にも述べるが、臨床心理学分野では、実際に人権侵害を行った結果として訴訟に至ったような事例や経験の蓄積が、良くも悪くも薄いのではなかろうか。しかし、だからOKでは断じてないはずである。「基本的人権の尊重」などが倫理綱領で述べられてはいるが、本当に痛みと内省を伴った結果としてのガイドラインであるのだろうか。このことは、リアリティーのなさと言ひ換えることもできるだろう。偏見かもしれないが、倫理綱領の内容が、時として形式的にのみ運用されることが、心理臨床業界の中にないか気になっている。倫理綱領の運用が、真の権利擁護や被援助者優先につながっているのかということを感じ取れるセンスが涵養されているかが大切なのではなかろうか。

第6章では、心理臨床において問題となりやすい倫理的問題が列挙される。守秘義務・報告義務・多重問題・組織との関係という項目建てになっているが、倫理的問題は恐らくこれだけではないだろう。当事者との関係性の問題や、臨床行為そのものへの内省に対しては触れられてはおらず、もっぱら心理臨床家の側だけの問題列挙であるので、筆者には物足りない。僭越ながら、リアリティーの希

薄さに関連するのではないかと感じた。

これからの「心理臨床倫理」に向けて

展開編は、各著者の論文であり、オムニバスとして読んでいておもしろかったが、展開編の中に更なる統一見解を求めることは難しい。その代わりに、読者の気づきを更に深めるような、踏み込んだ論述が行われている。

入門編を読んで全体的に感じたこととして、書名が「心理臨床の法と倫理」であるのに、法律との関連があまり述べられていないのではないかという感想を持った。しかし、これに関しては展開編で十分触れられており、書名との整合性が保たれているように思われた。

先にも述べたが、心理臨床業界が持つ臨床倫理を必要としなければならない実経験・リアリティーの薄さが、心理臨床における法と倫理の見識の発展にとってはアキレス腱であるかもしれない。しかし、対人援助においては「危うさと背中合わせ」というのが不可避であるので、まずはこれまでの臨床実践を内省する中で、「危うさ体験」をストックする必要はないだろうか。そして、ストックされた個々の事象を、決してクリーンカットしないような倫理的省察を行うべきであろう。本書は、そのためのよきチャートとなろう。

筆者が所属していた児童相談所では、虐待対応のためには、同意のない個人情報の共有が日々大量に行われ、逆に事件化した場合には、「知る権利」を盾に半ば暴力的に押しかけるマスコミに対して必死で「守秘義務」を貫徹し、またある場合には裁判所へ訴えてでも親子を強制分離し、子どもは強制保護され、虐待当事者からは昼夜を問わない恫喝を受けている。訴えられることは必発であり、裁判になったときの弁護士費用のための保険に、自らを守るために加入するのが常識となってい

る。そんな職員が、「家族再統合のために、臨床相談関係を契約しましょう」という行動も同時に起こさなければならない。

このような児童相談臨床現場の実態は、逆にあまりにもリアルではあるのだが、このような状況に置かれ続けることで、人権・倫理感覚が麻痺し、雑ばくで形式的な他者への向き合い方を生み出しているのではないかという危惧を持ち続けている。このままではだめではないかと思いつつも、切れ目のない日々

書評

長谷川正『東アジアの企業経営と歴史』（森山書店・2012年）

京都産業大学名誉教授 吉富和雄

I

我が国では、アジアの経済や経営に関する書物は、20世紀後半から開発経済学の分野や多国籍企業論の分野などにおいて出版されることはあった。しかし、アジアの国々や地域を個別に取り上げ、その経済や経営を論ずる書物が急速に多数出版されだしたのは、やはり21世紀になってからである。台湾、韓国、中国の研究者による著述もある。特に中国の急速な経済成長は多くの関心と呼んだ。中国は生産基地としてだけでなく巨大な消費市場にも成長したので、経営学関連研究者の関心は一挙に膨らんだ。

本書評で扱う長谷川正氏のアジア論（東アジア論）もこの日本経営学界の動向の中で生まれているが、類書と大きく異なるのは、日本を除くアジア諸国の近年に至るまでの経済・経営の停滞性に主な焦点を当てている点にある。著者はそれを「因果論的に」解明したいとしている。その意図の背後には、アジ

アの連続であるところが本当に危うい。このような現場もまた、本書で提起されている原理原則に立ち返れるチャンスがないとだめなのであろう。

心理臨床における法と倫理の世界は、まだまだ成熟途上の過程にある。本書がそれこそよいきっかけになって、業界への問題提起や、各現場でご活躍されている臨床家にとってよい指針となることを心より願う。

ア諸国の今後の継続的發展のためには、その停滞性に陥った諸原因・諸条件の克服が必要であるとの考えがある。

アジア経済の停滞性の原因に関しては、社会科学の巨人であるマックス・ヴェーバーによって100年ほど前に書かれた『宗教社会学論集』という研究を基にしている。その中には、大論文「儒教と道教」や「ヒンドゥー教と仏教」が含まれている。それらは、もちろんアジア経済の停滞性だけを論じたものではないが、結果としてその停滞性を論じる場合に優れた分析視角を提供しているのである。ヴェーバーのこの分野の業績は最近では顧みられることが少なくなっているが、著者はしばしばそれを参考にしている。

II

第1章では、アジア各国と比較する意味で西ヨーロッパを取り上げている。

内容はマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』